

ここがポイント
 教育課程の改善・充実は
 全ての教職員で行おう

1 カリキュラム・マネジメント

☆社会に開かれた教育課程

各学校が、社会との関わりを考え、社会とのつながりを意識した教育課程を編成し、社会と共有・連携しながら実施していくことです。

平成28年12月21日の中央教育審議会答申では「社会に開かれた教育課程」について次の三つの側面が示されています。

① 社会や世界の状況を幅広く視野に入れ、よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を持ち、教育課程を介してその目標を社会と共有していくこと。

② これからの社会を創り出していく子供たちが、社会や世界に向き合い関わり合い、自分の人生を切り拓いていくために求められる資質・能力とは何かを、教育課程において明確化し育ていくこと。

③ 教育課程の実施に当たって、地域の人的・物的資源を活用したり、放課後や土曜日等を活用した社会教育との連携を図ったりし、学校教育を学校内に閉じずに、その目指すところを社会と共有・連携しながら実現させること。

「カリキュラム・マネジメント」とは

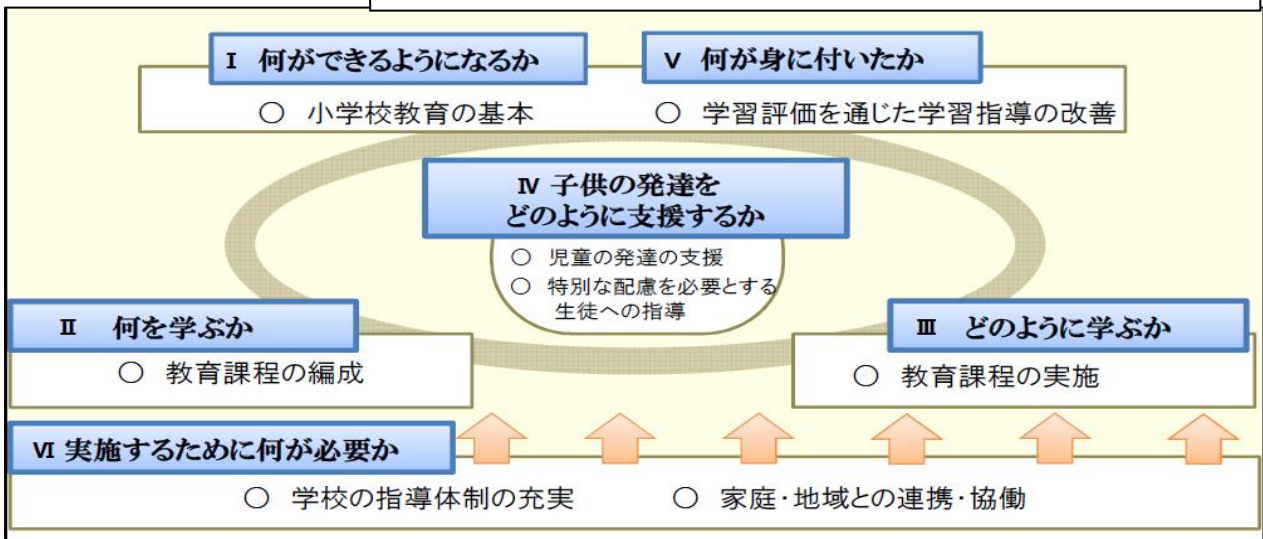
カリキュラム・マネジメントとは、各学校の教育目標を達成するため、教育課程を実施し、評価して、改善していくことです。

○これからの時代に求められる資質・能力を育むために
 ・各教科等の学習とともに、教科等横断的な視点に立った学習が重要であり、各教科等における学習の充実はもとより、教科等間のつながりを捉えた学習を進める必要があります。

・教科等の内容について、「カリキュラム・マネジメント」を通じて相互の関連付けや横断を図り、必要な教育内容を組織的に配列し、各教科等の内容と教育課程全体とを往還させるとともに、人材や予算、時間、情報、教育内容といった必要な資源を再配分することが求められます。

・特に高等学校においては、教科・科目選択の幅の広さを生かしながら、生徒に育成する資質・能力を明らかにし、具体的な教育課程を編成していくことが求められます。

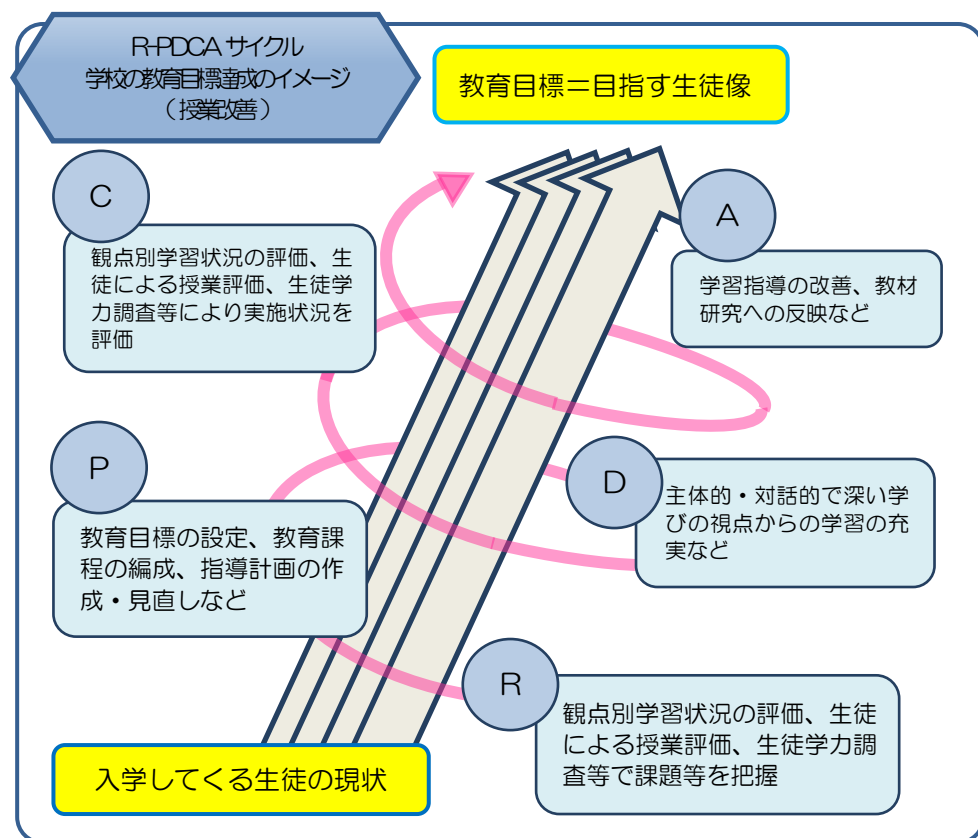
学習指導要領総則の構造と「カリキュラム・マネジメント」のイメージ



「カリキュラム・マネジメント」の三つの側面

社会に開かれた教育課程の実現を通じて、生徒たちに必要な資質・能力を育成するという、新しい学習指導要領等の理念を踏まえると、これからの「カリキュラム・マネジメント」は、次の三つの側面から捉えることができます。
(中教審答申からの抜粋)

- ① 各教科等の教育内容を相互の関係で捉え、学校教育目標を踏まえた教科等横断的な視点で、その目標の達成に必要な教育の内容を組織的に配列していくこと。
- ② 教育内容の質の向上に向けて、子供たちの姿や地域の現状等に関する調査や各種データ等に基づき、教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のPDCAサイクルを確立すること。



- ③ 教育内容と、教育活動に必要な人的・物的資源等を、地域等の外部の資源も含めて活用しながら効果的に組み合わせること。

カリキュラム・マネジメントを進める中で：

- カリキュラム・マネジメントを通して学校の課題の改善を図るには、**学校の教育課程に関する現状を把握**することが大切です。
- 「観点別学習状況の評価」や「生徒による授業評価」の結果を分析し、学校として、生徒に身に付けさせたい力の育成状況を的確に把握しましょう。
- そこから複数の課題を見出し、**重要度や優先順位による絞り込み**を行い、改善に取り組みましょう。

各学校においては、生徒の発達の段階を考慮し、言語能力、情報活用能力、問題発見・解決能力等の学習の基盤となる資質・能力を育成していくことができるよう、教科等横断的な視点から教育課程の編成を図ることが重要です。

なお、各教科及び総合的な学習の時間で育成した資質・能力を相互に関連付け、他の教科で育成した資質・能力が別の教科等の学習にいかされるようにすることが大切です。

内部の資源の活用の例としては、各教員が授業で用いた教材やワークシート等を教科として整理し、教員間で共有することが挙げられます。

また、地域等の外部の資源の活用としては、地域と連携した体験的学習活動や、インターシップの実施などがあります。学校内外の様々な人的・物的資源を効果的に活用していきましょう。

【参考】

リーフレット
「カリキュラム・マネジメントで改善充実の好循環へ」
チーム学校がパワーになる!!

平成29年7月 神奈川県立総合教育センター